

まえがき

社会とは、複数の人がひとつの場所に集まっている状態や、その人たちの結びつきのことです。

社会を適切に運営するためには、さまざまな施設や仕組みが必要です。それをインフラ（インフラストラクチャー＝社会資本）と呼び、道路や港、空港などの産業施設だけではなく、上下水道や学校、病院、情報通信網、物流など、日常生活に必要なものすべてが含まれます。

普段の生活の中では、その大切さになかなか気づきにくいのですが、自然災害などが起きて一部でも失われると、とたんに深刻な影響が出

て、不便な生活を強いられるようになります。

だからこそ、わたしたちの社会を維持してくれているものの成り立ちや歴史をよく知ることが必要です。

この本を読めば、今では当たり前になっている生活手段や社会の仕組みの起源がよくわかると思います。

どこかで、誰かがはじめたり、作り出したりしたものが、長い時を経て今につながっています。意外な事実にびっくりし、現代との結びつきに目を開かされるでしょう。

も く じ

お金の流通	4
国道	6
物流	8
野菜と流通	10
漁業	12
下水道	14
治水・河川整備	16
通信	18
消防	20

ゴミ処理	22
学校	24
時刻	26
乗り物	28
交番	30
新聞	32
貿易	34
銀行	36
カレンダー・暦	38
参考資料	40

お金の流通

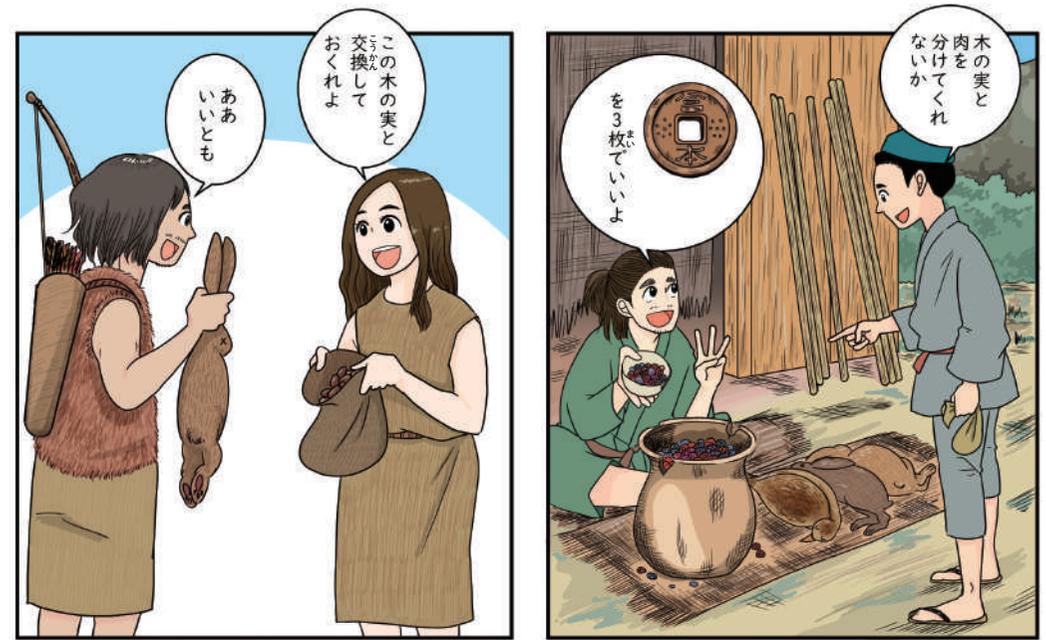
「お金」というものがなかった頃、欲しい物があると、人々は自分の持っている物と交換していました。これを「物々交換」と呼びます。しかし、「物々交換は公平ではない」と感じる人もいました。そこで、米や塩など、誰もが必要とする物と交換するようになりました。このような米や塩などを「物品貨幣」と言います。その後、もっと公平にするために使われるようになったのが「お金（貨幣）」です。



飛鳥時代～

現存する最古の貨幣は、紀元前670年頃、アナトリア半島（現在のトルコの一部）で使われていたとされる「エレクトロン貨」です。つまり、この頃から貨幣が使われていたと考えられています。

日本で貨幣が使われるようになったのは飛鳥時代（7世紀後半）で、中国（唐）の「開元通宝」を見本にして「富本銭」が作られ、使用されるようになりました。また、飛鳥時代の末、和銅元年（708年）に「和同開珎」が発行されたのを皮切りに、その後250年の間に金貨、銀貨、銅銭などが



次々に発行されました。

しかし、その後の約600年間は日本でつくられることはなく、中国から輸入した「宋銭」や「永楽通宝」などが使われていました。

再び日本で貨幣が作られるようになったのは16世紀後半の安土桃山時代で、豊臣秀吉が金貨、銀貨をつくらせたのがきっかけでした。しかし、庶民の手に金貨、銀貨が渡ることはなく、相変わらず「宋銭」や「永楽通宝」を使っていました。

江戸時代に入ると徳川幕府が貨幣制度を統一し、新しい金貨、銀貨、銭貨が作られて、全国で使われるようになりました。

江戸時代には、一両、一分、一朱、一文などのお金の単位があり、金貨、銀貨、銭貨が使われていました。時代劇でおなじみの金貨は一両が四分で、一分が四朱とされて、四進法で計算していました。ただし、金貨は上級の武士、銀貨は下級武士や商人、銭貨は庶民というように、身分によって使う貨幣が違っていました。



明治時代に入ると、近代的な貨幣の仕組みを整えるため、造幣寮（現在の造幣局）と紙幣司（現在の国立印刷局）が開設され、日本の貨幣の単位が「円」になりました。

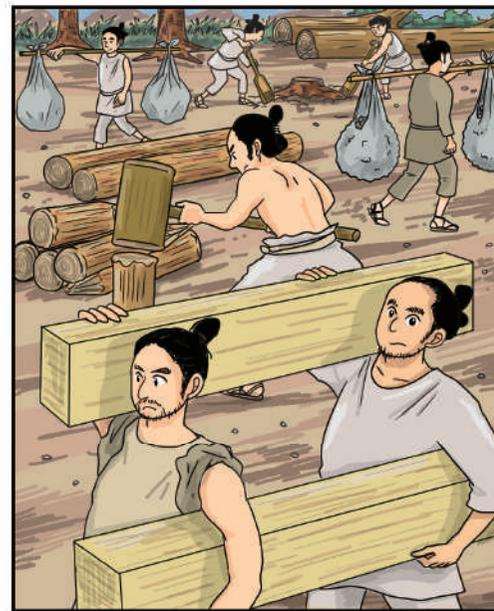
国道

国道とは、国が指定した道路のことで、正式には一般国道と言います。東京の日本橋と大阪の梅田をつなぐ1号線から、沖縄の糸満から那覇に至る507号線までありますが、合計507路線というわけではありません。なぜなら、48の路線が欠番になっているからです。つまり、日本国内には459本の国道があることになります。



紀元前5世紀のギリシャの歴史家ヘロドトスは、「古代エジプト（紀元前2500年頃）には、ピラミッドを建設する資材を運ぶための専用道路があった」と記述していて、これが最も古い道路の記録だと言われています。

日本ではじめて道路が整備されたのは、それから2000年近く経った紀元前548年で、山陽道が最初に開通したと言われています。しかし、本格的に道路が整備されるようになったのは、大化元年(645年)の大化の改新を経て、7世紀飛鳥時代に朝廷が支配を全国に拡大するようになってからです。朝廷は、東海道・東山道（本州中央部を通り、近江国から陸奥国まで通じる道路）・北陸道・山陰道・山陽道・南海道（紀伊半島や四国を通る道路）・西海道（九



州を通る道路）という七街道を整備しました。

それ以後500年以上にわたって全国的な道路整備はありませんでした。しかし、鎌倉時代に入ると源頼朝が道路の開発に力を入れ、鎌倉を中心に東国の各地を結ぶ道路を整備しました。これが鎌倉街道で、今も関東地方の所々にその一部と名前が残っています。

やがて江戸時代に入ると、江戸の日本橋を起点として、東海道、中山道、日光街道、奥州街道、甲州街道の五街道が整備されました。江戸と京都を結ぶ東海道は53の宿場があり、「東海道五十三次」として有名でした。

明治時代になると道路はすべて公道になりましたが、ほとんどの道は相変わらず悪路のままでした。そこで大正9年（1920年）、政府は「第一次道路改良計画」を立て、道路の舗装に取り組みました。舗装は東京中心部の道路からはじまり、関東大震災で一時中断しましたが、自動車の普及とともに全国へ広がっていきました。

昭和38年（1963年）には日本初の高速国道、名神高速道路（栗東一尼崎間の71.7キロ）が開通し、現在では高速国道だけでも総延長9204.8キロ、全国の国道の総延長は7万5367.6キロに達しています。また、昭和45年（1970年）には78.6%だった国道の舗装率は、令和2年(2020年)には99.5%になりました。

